



読売俳壇

矢島 渚男 選

空襲に故郷無くし 鱒雲

【評】敗戦の年は大都市や地方都市のB29による空襲が激しく、こうした境涯の人が多い。秋の空を見るたび故郷を失った思いにとらわれる。頬かすめ元気をだせと赤とんぼ

橋本市 若崎 喬子

【評】今年の暑さには熱中症ほどに行かなくても参った。彼岸からの急な冷気にも不調。そんな時、赤とんぼが「元気をだせ」と言わんばかりに頬を撫でていった。
秋晴や高い鳥居に石投げて

姫路市 菊亭 典夫

【評】鳥居に石を投げるのは、うまく乗ると幸運があるからという。なかなかうまくゆかないだけに熱中する。人の居ない時にして下さい。
守り抜き独り住む家小鳥来る

福島市 引地こうじ

一竿に鳥のめぐみ秋豊か

三郷市 村山 邦保

秋出水だあれもない避難場所

日立市 菊池三夫

秋冷や終身雇用出勤簿

龍ヶ崎市 小宮 光司

片付ける南瓜畑に忘れ物

佐野市 桑原 博

坊っちゃん列車乗ってみよようか瀬祭忌

伊賀市 福沢 義男

秋うらら死んでは起さる斬られ役

東京都 大武美和子

宇多喜代子 選

丁寧にしたむ夕日の秋日傘

【評】真夏の暑さにもまして暑いのが秋暑。外出に日傘が離せない。夕方になり、暑かった一日を思い出しつつ日傘を畳んでいる。
震災忌生暖かき風の吹く

太田市 阪本 和夫

【評】歳時記の「震災忌」は大正十二年九月一日の関東大震災のこと。この日、かの日を思わせるような生暖かい風が吹いている。改めて過ぎた日の災害のことなどを思う。
行き合いの空茶柱の立つ晩夏

芦屋市 田中 俊

【評】季節の変わり目の空。雲の行き交う晩夏。手元の湯呑みのお茶に茶柱が立つ。何かの示唆か呪いか。深い意味があるのか、ないのか。
つくばねの宿の夜明や霧しきり

松江市 和田 薫光

とんぼうの向うに海の広がりぬ

武蔵野市 渡辺 一甫

さるすべり空に広がり花ゆらぐ

東松山市 荒木美智子

木の実落ち木の実の落つ音も落つ

北本市 萩原 行博

円墳の裾濃き秋の夕べかな

加須市 萩原 康吉

通草採り雲衝くやうな孫連れて

島根県 重親 映人

赤チンを塗られた記憶運動会

武蔵野市 相坂 康

正木ゆう子 選

新幹線のこの珈琲に秋惜しむ

【評】東海道新幹線の車内販売が十月末に終了するという。私も度々お世話になった珈琲。その一杯を惜しみつつ飲む。まるで秋を惜しむように。様々なものが変わりゆくこの頃。瘦身は夕日にまぎれ刈田原

志木市 谷村 康志

【評】夕日が眩しくて、逆光の中に居る人が確と見えない。瘦身なら尚のこと、光に紛れて、誰なのかわからない。美しく穏やかな刈田の景。はなやきを吾もごうなり吾亦紅

名古屋市 渡辺 淳子

【評】吾も「紅」を「ごう」と言い換えてみるという、ちょっととした思いつき。「何をどう」「華やきを」。なんだか身につまされる、女ごころ。病む時は陽のあたる部屋白桔梗

池田市 後藤 和豊

的前にしばし飛び交ふ赤蜻蛉

埼玉県 竹本 遊児

駅毎にぶはーと開く扉秋の旅

下田市 森本 幸平

活力は丸干しいわし朝の膳

川越市 大野宥之介

秋海棠濁流の辺に飛沫浴び

羽生市 岡村 実

人類の去りて千年虫時雨

神奈川県 横塚 昌平

スーパームーン子の戒名に「月」在りて

東京都 松本 旬子

小澤 實 選

翳りぬし猫が飛び退く放屁虫

【評】放屁虫を捕えてもてあそんでいた猫が、急に飛び退いた。これは放屁虫得意の刺激臭あるガスの放出を行ったところだ。虫からすれば巨大な猫にも効果があったらしい。大谷が何人もある菊花展

八王子市 徳永 松雄

【評】今年の菊人形は、大谷翔平選手。彼が現代の英雄であることを意味している。投手、打者、走者、兜をかぶったものなどもありそう。白神の水をゆたかに新豆腐

秋田市 松井 憲一

【評】白神山地からの水を豊かに使ったつくった新豆腐である。豆腐の白さが清らかであることを、白神という地名が保証しているようだ。消防士の昇降訓練秋の空

海老名市 山田 山人

六感心そこは中央分離帯

栃木県 あらあひとし

ヒロシマのピカは語らず生身魂

神戸市 大浜 義弘

霞ヶ浦空全面に鱒雲

松戸市 倉林 高次

終電の出でより虫の駅となる

東大阪市 渡辺美智子

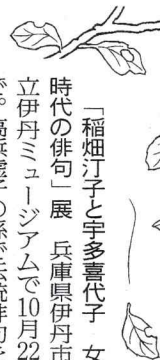
秋暑し愛犬ヴァンが怒つてる

秩父市 中島由美子

たばこ屋の公衆電話秋ともし

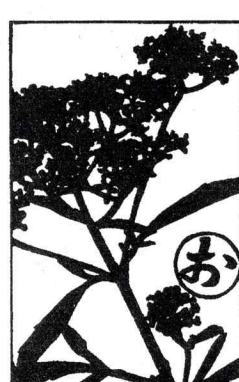
伊勢市 藤田ゆきまち

枝しおり折



「稲畑汀子と宇多喜代子 女性の時代の俳句」展 兵庫県伊丹市の市立伊丹ミュージアムで10月22日まで。高浜虚子の孫で伝統俳句を主導し、昨年亡くなった稲畑汀子さんと、現代俳句を代表する本紙俳壇選者の宇多喜代子さん。俳諧資料を所蔵する柿衛文庫ゆかりの女性俳人2人の俳句とその道程を愛用の品や資料でたどる。米国で預かった日本兵の手紙を遺族に届けたり、中国雲南省で稲作の調査をしたり。宇多さんの行動力の一端に触れられる。

宮坂静生編著『俳句鑑賞 1200句を楽しむ』 創刊45周年の「巨匠主宰の新聞連載をまとめた。芭蕉から現代俳人まで、四季折々の作品を短いコラムで紹介。楽しみつつ知識も得られる。(平仄社、3190円) ◆第41回現代短歌評論賞 中島裕介「八前衛」と実作 生成A1時代に、人が短歌をつくること」



題字デザイン・イラスト 福田美蘭